

懐旧の二

『青光』誌上で仲賢先生の「十五年前の回憶」を見つけ、江南水師学堂の一二の旧事を思い出し、仲賢先生の言うところと関係するので、また書き起こし、「懐旧の二」とするこの一篇を書いた。

わたしたちが学校にいたころは、^{きかんか}管輪堂と^{そうだか}駕駛堂の学生はかなり隔てがあったとはいうものの、まだ互いに敵視し合うまでには至らなかったが、操舵科の卒業生は“^{かんちゆう}船主”になれるが、機関科の前途はせいぜいが“^{きかんちゆう}大俵”にすぎず、結局は船主の部下である。だから駕駛の学生は少し威張っていたようだ。クラスの階級、つまり第一クラスと第二あるいは補欠クラスとの関係は、もっと不公平で、その実例はいっぱいあって、いま一二を挙げてみる。学生部屋の用具は、慣例では学校からもらう、第二クラス以下はテーブルが一脚だけだが、第一クラスは二脚以上使えて、仲賢先生の言う“花瓶の目覚まし時計”も備え付けてある。わたしの友人のW君は第一クラスのC君と同じ部屋であったが、後で別の宿舎に移り、自分のテーブル以外にC君の三脚のうちの一つを運んでしまった。C君はカンカンになって、“お前らが革命だなんだと騒いでも、ここまではやれんぞ”と罵った。何日かして、C君の友人K君がW君にちょっかいを出して、“こんな康党〔康有為ら戊戌変法派〕はぶちのめしてやる”と言って、ほとんど大立ち廻りになりかけたが、みんなはテーブル騒動の余波だと知っていた。

第一クラスは食堂の座席が決まっていて、各テーブル多くて六人を超えず、皆同じクラスかあるいは彼らにくっついていてる学年が下の生徒である。悠々と談笑しながら食べていて、奪い合って飲み込む必要もない。階級が低い学生はこんなに楽チンにはいかない。彼らは食事の合図を聞くや、まっしぐらに食堂に駆けつけ、第一クラスが占拠していないテーブルに空きを見つけるや、急いで腰を下ろし、この一飯はようやく安穩に口に入るというわけだ。こうした大騒動の中で、第一クラスはふだんよりもっと悠々としていて、両肘をカニのように張って、雁木型の廊下の真ん中を、のしのしとのし歩く。後ろから行くものは僭越にわたらぬよう、彼に付いてゆくしかない。食堂に着くや、慌ててあちこちに潜り込み、まるで夕方にねぐらを見つけられなかった鶏みたいだが、やっとの事で席を見つけても、漬物の上の何片かの脂身はとっくに影もなく、只飯を食べるしかない。わたしたち何人かはこうした階級制度に敬服せず、往々肘の間をかいくぐり、前方に突撃したが、この一件だけでも革命党の証拠になったかもしれない。

仲賢先生の回想の中で、最もわたしの注意を引いたのは山上の一匹の大きな狼である。というのはまさに年寄りの夜回りと同じように、彼もわたしの古い馴染みであったからである。わたしたちが学校にいたころは、いつも夕飯の後よく裏山に遊びに行った。だが山の窪地にある農家にはたくさんの犬がおり、時には吠え付かれるので、わたしたちは棍棒を持って出かけるのが常であった。ある日の夕方わたしと友人のL君が学校を出て、山の中腹にある古い廟に向かった。そこは同窓生がよく部屋を借りて麻雀をするところであった。わたしたちが校舎に沿った小道を行くと、両側は稲や麦の類が三四尺の高さに生えていた。十字路までゆくと、左側の道に大きな犬が一匹伏せているのを見つけ、例によって棍棒を振り上げると、犬は麦畑の中に姿を消した。

わたしたちがもう少し行って、二つ目の十字路に着くと、そいつがまた麦の中から半身を現し、すぐと前の畑に潜り込んだ。わたしたちはそいつの振る舞いが少しおかしく、またその尻尾がまともでないのを見、これは普通の犬ではないと思って、そこでその日の散歩は中止した。あとで同窓生の中にもそいつに逢った人がいて、手に棍棒を持っていたので、たぶん向こうの方から避けたのだろう。もともと五六年もそいつはそこらにいて、あげくに“白昼人を傷つけた”。今でもそいつが健在なのかどうか、折あらば現在の南京魚雷銃砲学校の同学に聞いてみたいものだ。

十日ほど前に書いて、郵便で晨報社に送ったのだが、どうしてだか途中で失くなって、いま改めて書き直したが、もう以前の興はなくなって、文の大意を記録するしかなかった。

※初出：1922年9月27日『晨報副刊』